

「台湾海峡は大丈夫か」？ (5)

練馬区 板橋光紀

金門の状況は日本でも度々テレビの報道番組にも紹介され、島の様子は大体世界中に知られている筈だ。台湾からは「金門島観光ツアー」もあり、国府の軍事施設以外なら誰でも見物出来るらしい。公害の少ない、景色だけは夢の島のように云う。私は小金門などの6つの小島の様子を見たいと言う衝動にかられた。40年も戦闘が無い訳だから、これらの守備についている将兵達はさぞかしヒマを持てあまして、無人島に送り込まれたロビンソンクルーソーみたいな心境で居るに違いないと想像していたから、真面目に軍務などやってられないのではないかと、半分将兵達に同情する気持ちですらいた。今年1月に台湾へ商用で出掛けた時に小島のいくつかへ渡るべく役所に掛け合ってみたが、6つの小島はいずれも軍事施設のカタマリみたいになっているようで、外国人の渡航は無理と判った。台湾では成人男子に兵役義務があり、金門の守備についた経験者は多い。旧友の中からその経験者を二名選んで金門諸島の様子を聞きとることにした。一人は外省人、もう一人は本省人、二人共金門では小部隊を指揮していた下級将校である。二人の話を整理すると以下のようになる。

(イ) 国府の支配する金門諸島ではいずれも地下深く穴が掘られ、メカニカルに、エレクトロニカルに先端技術が駆使された地下要塞となっており、将兵の住居はもちろん、各種の設備はすべて地下深くに設けられている為、空から爆撃されようと、大陸から何万発の砲弾を浴びようとビクともしないようになっている。施設の中核部分は核攻撃にも耐えられるようだ。

(ロ) 大金門島と小金門島の間は海底トンネルで繋がっており、将兵が行き来出来る。この辺りの島や海底の地層は土ではなく花崗岩になっている為、地下を掘る作業は難工事であったが、台湾には伝統的に大理石を採掘したり加工する技術があったので克服出来た。

(ハ) 大金門には5万人の将兵が居り、小金門には1万2千人、他の小さな5つの島々には各々数百人ずつ配備されているから、金門諸島全域では常時合計7万人の国府軍将兵が守備についていることになる。

(ニ) 軍に入隊して、台湾本島で軍務についている間はスポーツ読書の時間も取れたし、休暇をとって友達に会ったり、タマに実家へ帰ることも出来る。しかし金門へ派遣されたとなんに忙しくなり、休日無く、24時間3交替の勤務は金門に居る間中ずっと続く。馬祖島へ派遣されても同様である。

(ホ) 夜な夜な大陸から頻りに島々へ上陸を試みる人々が漂着する。これらの島々へもぐり込んでからまんまと台湾本島への移住に成功する人は多い。たいてい自転車のチューブを両腕の付け根に巻いて泳いで渡って来るからレーダーに映らない為発見が難しい。この辺りの海にはサメが多いから、渡海に失敗する人は溺れて死ぬ人の他にサメに喰われて命を落とす人も多い。

(ヘ) 島々へもぐり込もうとする人々の中に中国側のスパイが混じっており、金門で勤務した将校の多くがこれらスパイに出喰わした経験を持っている。夜間の勤務は常に緊張させられていた。海底トンネルのことを含めて、多分国府軍の施設の多くは中国方に知られているだろう。

これら二人の元国府軍将校の話はここまでほぼ一致していたが、私の最後の質問「これから台湾はどうすりゃいいの？」に対しては各々違った答えが返ってきた。外省人の友人は、

(ト) もし中国が実力を行使して、台湾が中国に吸収され

るようなことにでもなれば、台湾人の生活レベルは中国人の平均的なレベルにまで引きずり降ろされてしまう。そういった事態を避けるためには、いかに費用とエネルギーを投入しようとも国防の手を緩められず、金門と馬祖の確保は必須である。中国の覇権主義は不変であり、国際社会の中国に対する監視の継続と牽制こそが台湾の将来を左右する。台湾人だけが頑張ったってダメなのだ。これに対して本省人は、

(チ) もし台湾がこれほどの軍備に費用とエネルギーを消耗せずに済んだら、台湾人の生活レベルは欧米人のレベルに肩を並べる程豊かなものになっていたであろう。現状は確かに望ましい形とは云い難い。万が一の際にアメリカが台湾の味方に必ずなってくれるとも限らない。香港が平和裏に中国へ返還された事例もあることだし、大幅に台湾の分権が認められた上で、文化的にも経済的にも共存して行ける形が望ましい。元々中国はサイズが大きすぎて多種多様過ぎる訳だから、自由主義に成ればなる程一つの物差しで全地域を経営して行ける筈がない。チベットもウイグルも含めて一国三制度でも五制度でもお互いに持ち味を生かして仲良く助け合って行ければ良いじゃないか。中国は将来マイルドな連邦国家に変わって来るに違いない。だった。

私の仕事の順序として、台湾で話を整えてから福建へ指図を出しに行くケースが多い。最近中国と台湾との間で対話が再開され、閣僚級人物の相互訪問の話が出たり「民間の交流」という形にして第三国を会談の場にしたりして接嘴がなされるなど慶ばしい話が度々聞けるようになった。しかしながら今だに台湾と中国との間に直行便が無い為、台北からわずか300km程の福建へ行くには、フィリピンのマニラまで下って「く」の字を書いてアモイまで行くか、香港へ出て、「逆さV」の字にアモイや福州へたどり着くかの二通りしかない。直行便があれば一時間で飛び越せる距離を一日掛かりで長旅を強いられるのがつらい。

「直行便」の話は数年前から何度も出ては消え、実際は具体的な計画は何も決まっていらない。台湾の知人達に何度か聞いてみたことがあるが、ある人は「あと2年は掛かるだろう」と云い、他の人は「4年」だ、別の人は「8年は掛かるかも知れない」等々と、反応はさまざまで、いずれもそれらの年数を要する根拠を説明してくれない。先日このことを福建の友人にこぼしたところ、「多分その台湾人達は誰かと誰かが死ぬのを待つ年数を云ったのではないか」との奇妙なコメントを出してきた。私はお年寄りがいつまでも長生きして、安楽な余生をおくって欲しいと心から念じている一人であることを先に宣言しておきたい。しかしそう云われてみると台湾の諸改革と豊かさは「長老」とか「実力者」と呼ばれた人物が亡くなる度に加速されて来たような気がしないでもない。儒教のインパクトが色濃く残る中国では、お年寄りを大事にするという結構な伝統があり、長老の主張にはなかなか逆らえないから、何事も「多数決」で決定出来るとは限らない。日本でも「外野でタマ拾い」する筈だった長老がノコノコとベンチへ入って来て監督や選手を指図したり、球団オーナーやコミッショナーばりに方針を決定、時には審判の判定をひん曲げようとする人も居るから観衆までが冷めてしまう事がある。

中国の事情にも共通した点が散見出来る。鄧小平が権力※の大きな部分を掌握したのは1970年代末頃だが、その鄧小平でさえ現役の時代は葉劍英や掲尚昆ら先輩、同僚にずいぶん気を使っていたようだ。しかし彼は老害長老群の引退を待つようなことはせず、自分の引退と前後して多くの長